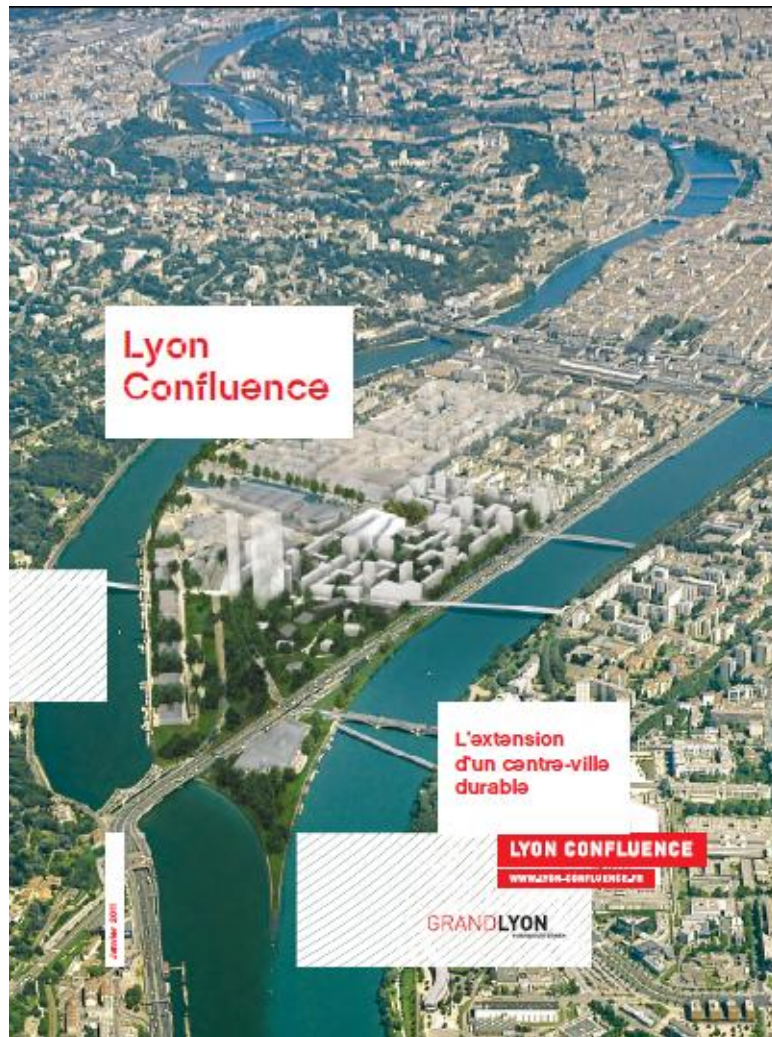


# リヨン・コンフリュアンス

## 持続可能な都市中央部の拡張

[WWW.LYON-CONFLUENCE.FR](http://WWW.LYON-CONFLUENCE.FR)

リヨン都市共同体（グラン・リヨン）



### 全体計画の鍵となる数字

計画の対象となる地区：150 ha

新開発地域：70 ha

長期的な建設計画用地：1 000 000 m<sup>2</sup>

リヨン・コンフリュアンス協議整備地区（ZAC）フェーズ 1  
41 ha / 400 000 m<sup>2</sup>（外法純面積）

リヨン・コンフリュアンス協議整備地区（ZAC）フェーズ 2  
35 ha / 420 000 m<sup>2</sup>（外法純面積）

ペラーシュ・サント＝ブランディーヌ  
100 000 m<sup>2</sup>から 120 000 m<sup>2</sup>（外法純面積）

レジャーとイノベーションの場として、コンフリュアンスでは新しいライフスタイルを提案します。コンフリュアンスに建設されるのは 21 世紀の都市です。快適な衣食住、産業、憩いの場が提供される、ビジネスと生活が混在する都市となります。持続可能な都市であり、自然と市民のそれぞれが自分たちに属する空間を見出せます。ここには、密度の高い都市を補うものとしてふんだんな公共空間が確保されます。リヨン・コンフリュアンスでは都市、環境、人々の営みが共存します。この野心的な計画により、リヨンはヨーロッパにおけるその知名度を向上させることでしょう。

リヨン・コンフリュアンスは、リヨン都市開発の象徴であり、リヨン都市共同体（グラン・リヨン）の住人全員にとってのチャンスであり、誇りでもあるのです。

## インフォメーション

### リヨン・コンフルュアンス公社 (SPLA オフィス)

住所：28, rue Casimir Perier 62002 Lyon

電話：04 78 38 74 00

[info@lyon-confluence.fr](mailto:info@lyon-confluence.fr)

### コンフルュアンス情報センター (Maison de La Confluence)

(一般向け情報センター)

102, cours Charlemagne

69002 Lyon

[maison@lyon-confluence.fr](mailto:maison@lyon-confluence.fr)

### アクセス

トラム T1 号線

« Sainte-Blandine (サント＝ブランディーヌ) » 駅

または« Montrochet (モントロシェ) » 駅

プレスキル・シャトルバス n° 91

« Charlemagne Casimir Perier (シャルルマーニュ・カジミール・ペリエ) »

バス n° 8

停留所 « Casimir Perier (カジミール・ペリエ) »

メトロ A 号線

ペラーシュ駅から徒歩 10 分

### 都市開発プロジェクトの情報サイト

[www.lyon-confluence.fr](http://www.lyon-confluence.fr)

地域情報サイト

[www.laconfluence.fr](http://www.laconfluence.fr)

### リヨン・コンフルュアンス公社

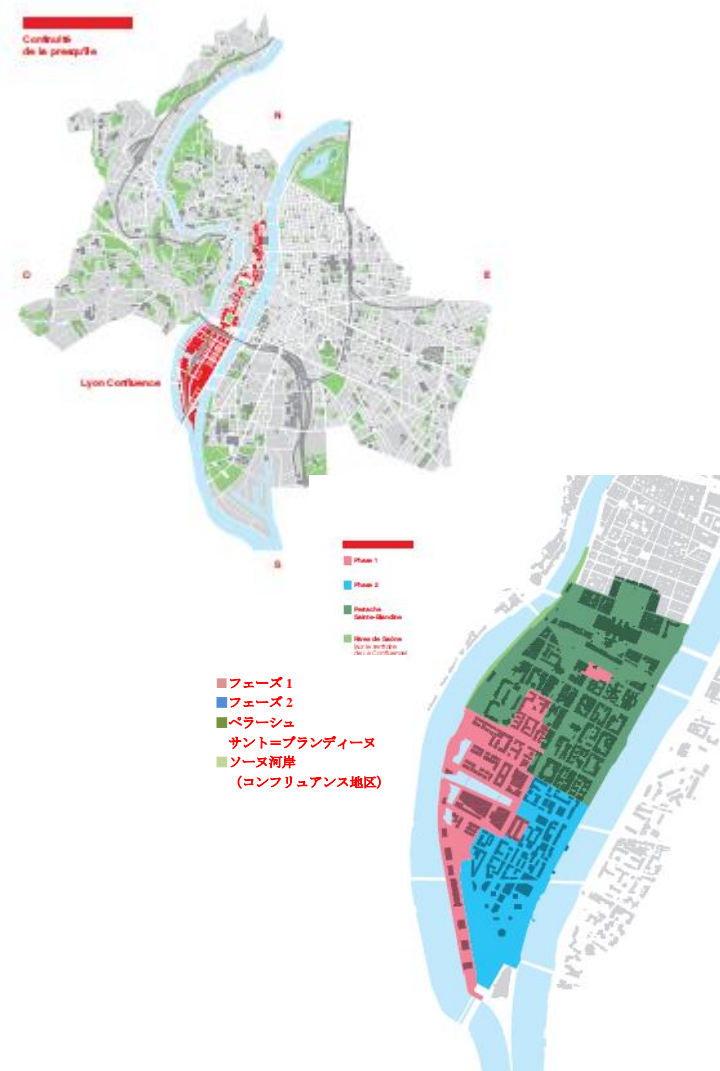
リヨン・コンフルュアンス公社は 1999 年 7 月にリヨン・コンフルュアンス地区を開発するために設立されました。その役割は以下の 5 つです。

- プロジェクトの調査と企画
- 不動産獲得
- インフラ整備
- 整備された土地の販売
- 協議と情報提供

### リヨン・コンフルュアンスとは

都市計画の名称であると同時に都市整備を担当する会社 (SPLA) の名称でもあります。

この整備計画は国鉄 (SNCF) ペラーシュ駅の南側 150 ha に広がり、市庁舎からペラーシュ駅までの現中心街「プレスキル地区」の面積に相当します。



## コンフリユアンス

### ビジネスと生活が共存する現代的な中心地



コンフリユアンスでの快適な生活とビジネス。

この地域には住居、オフィス、商店、レジャー、文化施設、公共施設など、バランスのとれた都市のすべての機能がそろっています。

#### クオリティ・オブ・ライフ

住宅とオフィス用の建物は、持続可能な開発を目指した条件を満たしています。これらの建物は太陽光を確保しつつ快適な景観が得られる造りになっており、屋根と壁には植物が植込まれています。再生可能エネルギーが利用され、高品質環境基準は道路と公共空間の設計にも適用されています。自動車の使用が制限され、徒歩、自転車、公共交通機関での移動を容易にしています。

#### すべての家賃水準に対応する多様な住宅

きめの細かい住宅計画により、裕福な家庭から、低所得家庭、学生、年金生活者、障害者、単身生活者まで、さまざまなニーズにあった住宅がそろえられています。この地区の都市整備は、大都市での生活のバランスを考え、世界の多くの都市にみられる差別をなくすことに尽力しています。

#### 多様なアクティビティ

コンフリユアンスでは、大都市の輝かしい名声に欠かせない経済活動にも配慮したまちづくりを行っています。美術ギャラリー、イベント・PR会社、マスコミグループ、本社機構などが集まっています。これら企業は、交通機関の利便性や、エネルギーコストが削減できる高品質環境基準を満たした建物に代表されるコンフリユアンス独特の利点を高く評価しています。

#### ガバナンス

ローヌ・アルプ地域圏議会が、係船ドックの前の新開発区域の中心部に移転されました。コンフリユアンスに移ることでローヌ・アルプ地域圏議会は市民に近づき、国際的な舞台でのビジビリティも改善されました。

#### 文化的生活

ビジネスと仕事の場であるコンフリユアンスはレジャー、ショッピング、文化的な活動、観光などにも最適です。

トラムウェイが 2005 年からコンフリユアンスまで延伸され（クール・シャルルマーニュ）、2014 年までにはメトロ B 号線のジェルラン駅に連結されます。

#### アーバンミックス

機能、世代、社会階層が地域全体を通じて混在しています。経済活動や社会階層による区域分割を排除する都市づくりを実現しました。

## 都市中心地の持続可能な拡張

## 画期的な都市開発計画の起源

リヨン市議会議員とアーバンデザイナーたちは何十年にもわたってコンフリユアンスの将来について考えてきました。半島の南側先端の開発は、都市の発展とその自然環境に密接に結びついたリヨンの歴史にとってのマイルストーンとなります。

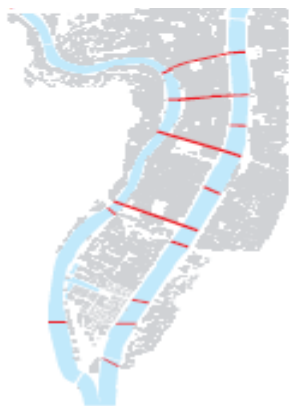
緑地



中央軸



橋と連絡路



計画の各段階中央



### 特殊な地理

二つの川の合流点（コンフリユアンス）にある都市 - この地理的条件はリヨンの特徴で、ヨーロッパのどの大都市にも見当たりません。コンフリユアンス地区には 5km の河岸が整備され、これがこの新開発地域の正面玄関としての役割を果たします。ソーヌ川の対岸には、濃い植生の中に建物が散在する切り立った丘があり、これがコンフリユアンスに荘重な背景を与えています。ソーヌ川沿いにミシェル・デヴィーニュが作り出したランドスケープは、その自然の延長線上にあります。

### 都市の中心に

二つの川とは別に、リヨンのプレスキル（中州部分）の都市空間は北から南にのびる一本の軸が形成され、これが市役所から新しいローヌ・アルプ地域圏庁舎まで、いわば脊柱のように伸びています。コンフリユアンス地区の整備はこの都市の骨組みの力を利用しています。通り、広場、サイクリングロード、橋、幹線道路。これらが構成する交通網によって、この地区の発展と他の地域との連絡が可能になります。リヨンの心臓部は公園や散歩道、街路樹などによって脈打ち、これらが血液を巡回させているのです。

### 各地域の独自性

コンフリユアンスを構成する各地区は、はっきりと異なる特徴をもっています。ペラーシュ・サント＝ブランディエヌ地区は、20世紀初期に最初の低家賃住宅が建てられた区画です。庶民的で親しみやすい雰囲気を残しながらも、現在は大規模な改新の真っ最中にあります。ペラーシュ駅のわきにあるアルシーブ広場（古文書館広場）は、2010年10月に完成しました。リヨン市立公文書館に添うように建設され、真新しいオフィスビル、刑務所、警察署、バスの車庫が隣接しています。付近には現在、改装中の物件も数多くあります。住宅用の建物向けには、エコ・リノベーションやカーボンフットプリントの改善を目的としたフィジビリティ調査が行われています。少し南に下がったソーヌ川沿いの係船ドック広場とランボー港地区も活発に動いています。住宅、オフィス、商店、レジャー施設、レストラン、公共空間が共存し、中心部の雰囲気を作り出しています。パズルの最後のピースとなる、フェーズ2に整備が計画されている南東の市場地区は、サント＝ブランディエヌ地区と係船ドックにつながっています。この地区は、昔の卸売市場の幾何学的な区分にヒントを得ながら、既存の通りを延伸するかたちになります。旧市場の幾つかの建物は転用され、その間に新しい建物が並びます。こうして、この地区は現代性を取り入れながら、昔の産業の歴史を受け継ぐこととなります。

## 湿地帯から人の住む活気のある地区に

リオンは鉄道の開通とともに 19 世紀に工業の時代に入り、ペラーシュは労働者の町となりました。

### 18 世紀以前：河の治水事業

ローヌ河とソーヌ川が出合う地理的な交差点は早くから戦略的に重要な拠点の様相を呈していました。紀元前 1 世紀からローマ人はこの二つの川の合流点を見下ろす丘の上に城砦を築いています。町はそれ以降二つの川の間で発展し、ついで徐々に東のほうに広がっていきました。プレスキルの先端部は湿地帯で、川の気まぐれにさらされ、エンジニアのアントワーヌ＝ミシェル・ペラーシュが 18 世紀末に野心的な埋立て整備計画を始めるまで、長い間人が住める土地ではありませんでした。

### 19 世紀：工業の進出

金属工業、屠殺場、工場、ガス製造工場、醸造所などの産業活動が、鉄道を中心に発展しました。ペラーシュ駅ができたのは 1857 年のことで、ランボー港は 1926 年に完成しました。そして労働者たちが、これらの設備の近くに居住し始めました。

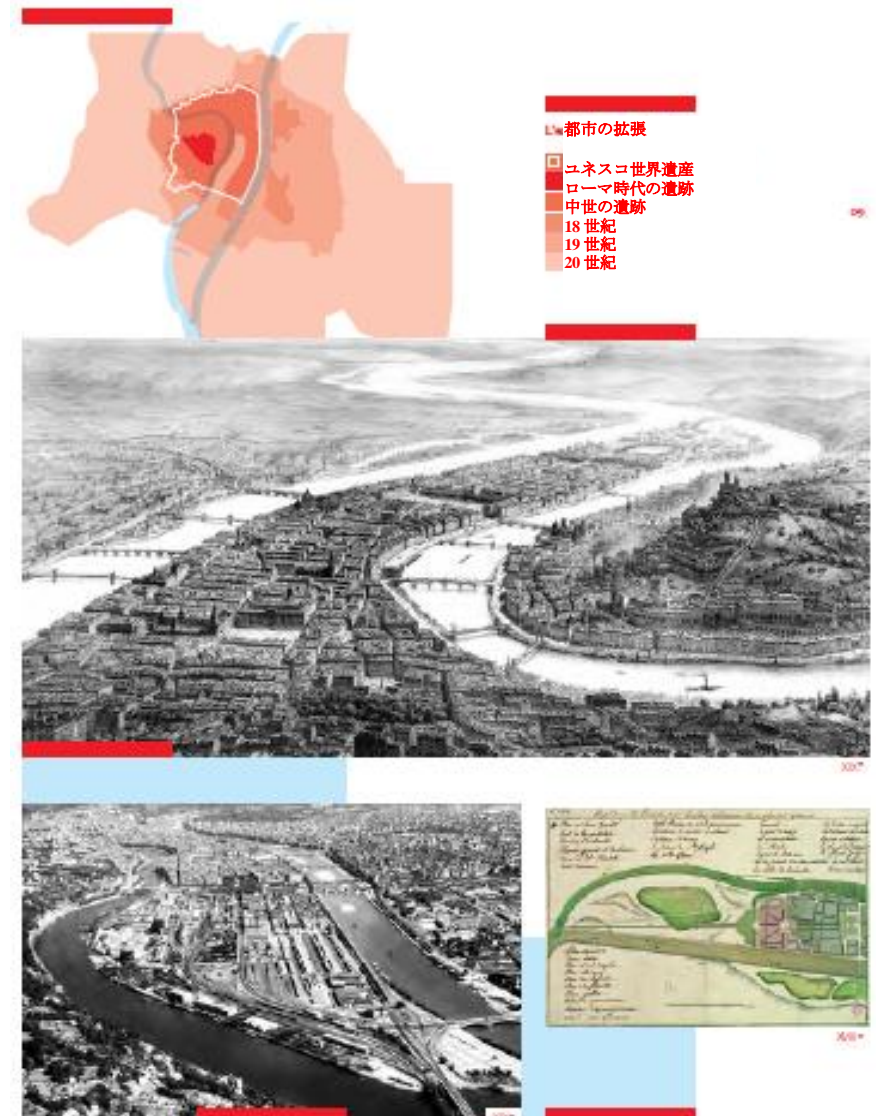
### 20 世紀：さびれる町外れ

この地区の物流面での活動が、高速道路 A7 号線の建設、ペラーシュ乗換えプラットフォームの完成、卸売市場の進出とともに 1960 年代から 1970 年代に頂点に達します。しかし 1990 年代に入るとこうした活動は足踏みをし、卸売市場の移転が検討されるようになります。こうした時に、元首相であったレイモン・バル市長（1995 - 2001）の主導のもとに、この地区に対する関心のうすれがかえって再開発のチャンスと見なされるようになったのです。土地が明け渡され、巨大な都市中心部がかたちづくられていきます。

### 21 世紀：復活

リオン市長兼グラン・リオン会長であるジェラルド・コロンの後押しにより、最初の協議整備地区（ZAC）の整備が開始されたのは 2001 年のことです。ペラーシュ駅のそばのアルシーブ広場からソーヌ川に沿うこの地域の南西部までに、住宅、オフィス、商店、公共空間が建設されました。

この地域に人々が移り住むと同時に 2010 年にフェーズ 2 が始まり、卸問屋市場の移転によって空いた地域の整備が開始されます。その北側のサント＝ブランディヌ地区では、エコ・リノベーション計画が始動しています。キッシュネル橋以南のソーヌ川の両岸にはソーヌ公園が建設され、ペラーシュ駅とそれに隣接する乗換えプラットフォームの再整備計画も着手されます。このようにこの再開発計画は、カルノー広場から二つの川の合流点までの 150 ha の未来像を描くという大規模なものへと発展しました。





## 数字でみるコンプライアンス

計画対象地域  
150 ha

使用目的転換土地面積  
70 ha

緑地  
35 ha

建設計画  
協議整備地区フェーズ 1  
400 000 m<sup>2</sup>

住宅 1670 戸  
145 000 m<sup>2</sup>

第三次産業  
130 000 m<sup>2</sup>

商業、ホテル、サービス  
95 000 m<sup>2</sup>

公共施設  
30 000 m<sup>2</sup>

この地区のある地点から川までの最大距離  
400 m

公共交通機関への最大距離  
250 m から 400 m

公団住宅  
25% から 30%

中間的住宅  
15% から 20%

分譲住宅  
または自由価格賃貸住宅  
50% から 60%

建設計画  
協議整備地区フェーズ 2  
420 000 m<sup>2</sup>

2 000 戸  
160 000 m<sup>2</sup>

第三次産業  
160 000 m<sup>2</sup>

商業、サービス  
12 000 m<sup>2</sup>

公共施設  
18 000 m<sup>2</sup>

タワー  
70 000 m<sup>2</sup>

2000 年初頭の住民数  
7 000

計画完成後の住民数  
16 000

2000 年初頭の雇用数  
7 000

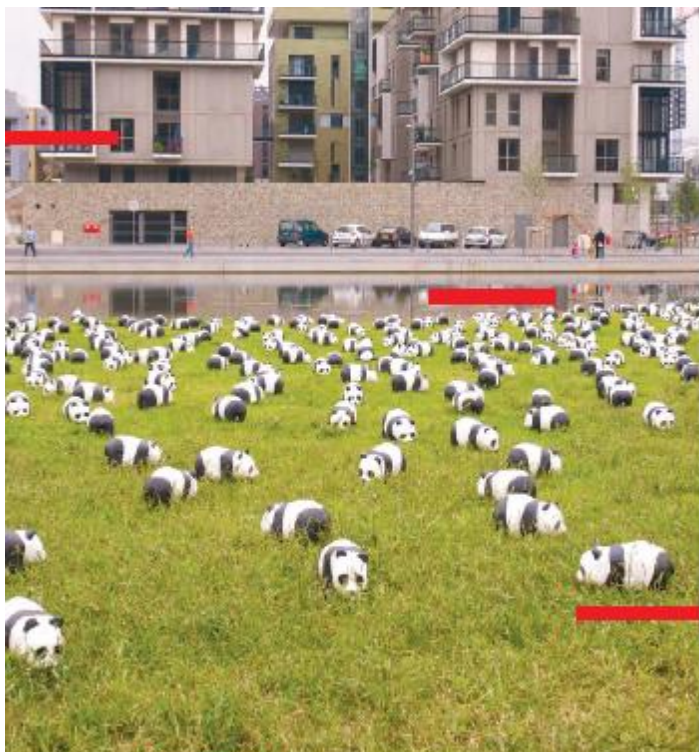


## ハイ・クオリティな都市

「ワン・プラネット・リビング」プログラム 10原則

出典：www.panda.org/fr

1. カーボンレス
2. 廃棄物ゼロ
3. 持続可能な輸送
4. クオリティ・ライフと福祉
5. 持続可能な地元産原材料
6. 持続可能な地元産食料品
7. 持続可能な水の管理
8. 自然な住居と生物多様性
9. 文化と遺産
10. 公正さと地元との提携



## 保証された取組み

当初の調査段階から、エネルギー消費量管理、環境にやさしい交通手段の発展、クオリティの高い緑地整備、廃棄物処理といった観点から模範的である街づくりを目指してきました。時とともに、これらの要件は確固としたものになってきています。コンプライアンスの究極的な目標は、将来の世代に向けた街づくりです。

### アジェンダ 21 とリヨン都市共同体（グラン・リヨン）気候計画

コンプライアンスのアプローチは、地域レベルを超えた、自治体レベルでのより大きな取組みの一部を成しています。このアプローチは、リヨン都市共同体（グラン・リヨン）がアジェンダ 21 の戦略と行動計画、特に「気候計画」の中で決めた戦略をもとにして、この地区に合わせたかたちで進められています。リヨン・コンプライアンス事業は、新築建物に省エネ努力を課し、サント＝ブランディエヌの既存建物ではエコ・リノベーションに努めることにより、温室効果ガス排出量の削減（2050年までに「4分の1に削減」）目標達成に参加します。

### EU「コンチェルト＝ルネッサンス」プログラム

係船ドック地区にある住居建物及びオフィスビルの生物気候学的設計、および代替エネルギーの大規模利用により、コンプライアンス再開発事業は 2004 年に「コンチェルト＝ルネッサンス」プログラムに選定されました。欧州委員会が財政支援するこのプログラムを通じてコンプライアンスは、A 区画、B 区画、C 区画において年平均電力消費 50kW/m<sup>2</sup>を達成し、消費電力の 80%を再生可能エネルギーでまかなうことを目標としています。

### 仏政府による支援

2009年にエコロジー省が行った最初のエコ地域表彰においてコンプライアンスは、密度の高い地区と広い公共スペースとのバランスの良さを高く評価され、「都市の比重と形態」賞を受賞しました。

### フランス初の WWF 認定「持続可能な地区」

WWF が開始した「ワン・プラネット・リビング」プログラムでは、あらゆる面（エネルギー、水、廃棄物、生物多様性等）において生活の中でエコロジカル・フットプリントを削減することを目標としています。これまでこのプログラムは、新築プロジェクトの中で試験されてきましたが（ロンドン南部のベッドゼッド、アブダビのマスダール、ポルトガルのマタ・デ・セシンプラ・ツーリスト・コンプレックス等）、初めてフランスにおいて、既存の市街地（サント＝ブランディエヌ）を含んだ地域にこの取組みが適用されます。2000年から2030年までの間、温室効果ガス排出量の増加を防ぐという野心的な目標が掲げられています。

## インテリジェント・モビリティ

公共スペースの整備は長い間、車を中心に考案されてきました。その結果、都市は渋滞と公害に悩まされています。今日のモビリティには、駐車スペースや道路の整備だけではなく、包括的な構想が必要とされているのです。

### 共有スペース

コンフリユアンスでは、移動手段を対立させることなく、歩行者、自転車利用者、自動車利用者、公共交通ユーザー誰もが共存できるまちづくりに取組みます。この地域の都市計画では、交通速度を落として（時速 20km 又は 30km 限定区域）、すべてのユーザーが道路を共有できることを目指します。車の増加を避けるよう駐車スペースの数を考慮します。そのためにフェーズ2では、ペラーシュ駅に沿うかたちでこの地区の周辺に公共駐車場が2ヵ所建設されます。住居建物とオフィスビルは地下駐車場を備えますが、その目的は様々なユーザーの間で上手に場所を共有することにあります。駐車場を地下にすることで、地上では、樹木を植えて町中に緑を増やすための広いスペースを確保できるようになります。

### 地元密着性とアクセスの利便性

商店、医療施設、学校、レストラン、映画館など、日常生活に必要なサービスが集まっているコンフリユアンスでは、地区内での車の使用は必要ありません。環境にやさしい移動手段により、全てに簡単にアクセスが出来ます。

徒歩で - 広い歩道、ソーヌ川河畔の遊歩道などを整備することで、この地区は「歩きやすく」なっています。カルノー広場とアルシーブ広場との間に新たな歩行者天国2ヵ所を設置することが検討されています。

自転車で - 西トンネル道路に、カルノー広場とアルシーブ広場間を結ぶ双方向のサイクリングロードが設置され、これがシャルマーニュ大通りに沿って延伸されます。ソーヌ川河岸にも自転車でのアクセスが可能です。将来的には、橋によりローヌ川とソーヌ川を横断できるようになります。公共交通機関で - 2005年以降、コンフリユアンスの中心地にはトラムが乗り入れています。コンフリユアンス先端まで延伸された後、1号線は2014年までにジェルラン地区まで伸び、地下鉄B線に連絡するようになります。さらにコンフリユアンスの南部に建設が予定されている鉄道駅がペラーシュ駅を補うこととなります。

4万人がペラーシュ駅と乗り換えプラットフォームを利用しています。

オフィスに駐車場がある場合、働いている人の74%が自動車を利用します。駐車場がない場合はこれが、34%まで減少することがわかっています。コンフリユアンスの整備計画のフェーズ2では、オフィス100m<sup>2</sup>に対し0.5の駐車スペースのみが割り当てられます。





## 空調の削減

従来の空調システムは、エネルギーを大量に消費する上に、温室効果ガスを排出します。

自動日射制御システム、ハイテクガラス、自然換気などにより、コンフリユアンスの生物気候学的設計は今日空調を必要としません。



## 生物気候設計地区

コンフリユアンスでは、生活をより快適にしつつエネルギー消費を削減するために、住居やオフィスと同じように、公共スペースの設計でも日射と通風が考慮されています。

### 四季を通じての快適さ

まずは地区規模で、さらに細かく区画規模で建物の向き、形状、高さなどに関するシミュレーションを行い、年間および一日の日照と風の影響を十分に分析しています。

冬- 各建物には、最低2時間の日射と自然光を得ることが義務づけられています。日当たりが比較的良くない側は、サービス機能が入居します。通りの形状も北風が吹きぬける通路にならないように配慮されます。

夏- 自然な風を通すために区画の閉鎖を防ぎ、通り、公共スペース、建物の中庭には日中に日陰が出来るような設計がほどこされます。

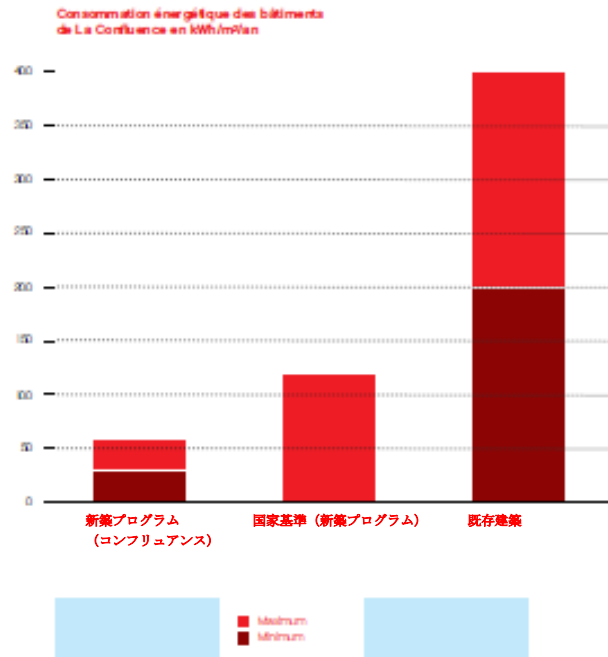
春・秋- 日照を利用して住居の暖房消費を削減します。

### 自然な涼しさ

中心地の夏の気温は、それ以外の周辺地と比較して3度から7度高くなります。いわゆるヒートアイランド現象です。それを軽減するためにコンフリユアンスでは、壁、建物正面、バルコニーに草木を植えることなどで、緑を増やしました。池、噴水、水飲み場も設置しました。道路の舗装や建物の外装は、太陽の光を吸収するのではなく反射させるよう設計されています。

色の濃いコンクリートは夏季に60度に達する場合があります、熱は夜間に放出されます。植物の温度は30度を超えることはありません。

## コンプライアンスの建物のエネルギー消費量（年間 kW/m<sup>2</sup>）



## ゼロエネルギーを目標に

再生可能エネルギー利用の省エネビル：コンプライアンスでは、エネルギー性能の向上は「富裕層」に限られたものではなく、新築建物全体に課せられる義務基準です。サント＝ブランディーヌの既存住宅も例外ではなく、断熱により負荷を40%軽減し、再生可能エネルギーを利用することが求められています。

### 段階的に厳しくなる要件

環境グルネル会議、新規熱規制、市民と産業界の意識の向上、技術の進歩など、今日、すべてが建物のエネルギー性能改善を支援しています。コンプライアンスで最初に建設された区画のエネルギー平均消費量は年間50kW/m<sup>2</sup>になりますが、これは設計段階時に施行されていた熱規制による基準（2005年時点、年間120kW/m<sup>2</sup>）の約3分の1に相当します。この地区の第二世代の建築は、更に省エネ指向になっています（年間15から30kW/m<sup>2</sup>）。さらに整備計画フェーズ2で建設予定の次世代ビルの中には、エネルギー生産がエネルギー消費を上回るポジティブ・エネルギービルが含まれるはずです。ペラーシュ・サント＝ブランディーヌ地区の大半の建物は断熱規制が一切存在していなかった1974年以前に建てられたために、エネルギー消費量が非常に大きくなります（年間200から400kW/m<sup>2</sup>）が、エコ・リノベーションによりこの地区の住居の省エネを進め、エネルギーの年間消費量を50kW/m<sup>2</sup>まで軽減することが予定されています。

### 潜在的エネルギーの開発

太陽光：ペラーシュ駅の屋根、シャルルマーニュ・スケート場の屋根、新築ビルの正面等に設置する太陽光パネルで、建物の電力需要の半分以上をまかないます。  
木材：係船ドック区画では、木材を利用したボイラーが利用されています。将来的には、バイオマスによる熱供給ネットワークがコンプライアンス全体に整備されます。  
風力：たとえその利用が限定的であるとしても、小型風力発電も地区のエネルギーニーズへの回答となります。

### 1400ユーロ

エコ・リノベーションによりエネルギー消費量が年間350kWh/m<sup>2</sup>から年間50kWh/m<sup>2</sup>に削減された場合（2010年想定）、60m<sup>2</sup>の既存住居に住む人が年間に節約できる金額。

### 第二の皮膚

サント＝ブランディーヌでは、外断熱が最も経済的かつ収益性が高いとされるソリューションになります。このソリューションは建築および遺産という面からのクオリティも考慮しています（ターゲットは4000軒の住居の50%をエコ・リノベーションすることです）。

## 貴重な水資源

水を制御することで得られた土地であるコンプライアンスは、水の恩恵と共にその怖さも知っています。コンプライアンスでは、整備により洪水のリスクを軽減し、景観における水の価値の向上を図ります。また水資源を保護し、下水道システムの監督に務めます。

### 氾濫の回避

市街地（道路、駐車場、屋根）における防水加工により土壌の吸収能力が阻害されると、大雨の場合に地区が浸水する可能性があります。屋上での雨水の貯水、ビル面積に限定される駐車場面積、公共スペースの緑地化など、土壌の浸透性向上のためのすべてのソリューションがコンプライアンスでは採用されています。ソヌ公園では、景観にとけ込んだ排水路により雨水がソヌ川に流されるシステムが取られます。

### 水不足対策

回収された雨水は、散水、トイレ、駐車場とオフィスの洗浄など様々な用途へとリサイクルされます。「ル・モノリット」ビルは、散水需要の3分の2以上を満たす雨水回収装置を備えています。源での節水も必要です。

- ◆ 住居内の給排水設備には、2種類の水量調整が出来る水洗トイレ、温度自動調整を備えた水栓、水圧調整装置などが装備されます。
- ◆ コンプライアンスでは人工散水装置を利用しないため、公園の植物はその抵抗力により選ばれます。

2030年までに、水道使用量の50%削減を目標として定めています。

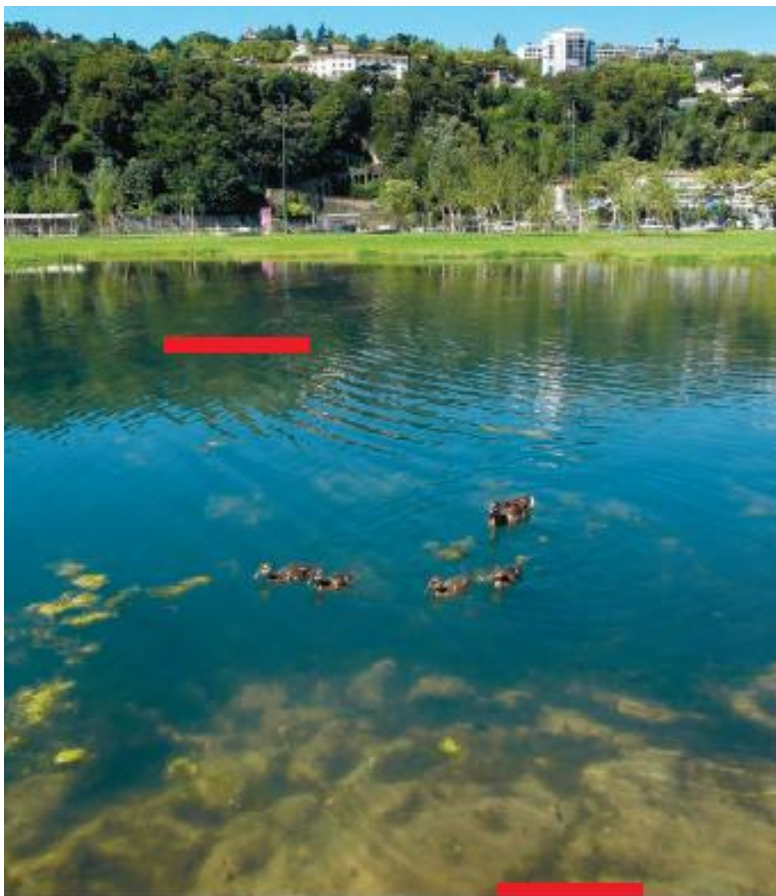
### 家庭用排水

技術の進歩により、今日ではリサイクルシステムも向上しています。シャワーや洗面台から出る家庭用排水の再利用システムは、給水用温水タンクの予熱に利用でき、さらに生物学的処理後には散水に利用できます。市場地区の建物にはこのようなシステムを装備する予定です。

### 市街地の舗装

接合部分に浸透性を持たせた敷石、多孔性敷石、芝生など、テラス、公共広場、駐車スペースに異なる舗装をすることにより、水の循環や浸透を助けます。





## 環境保全地域

セキレイ、鶉、黒トビ、カワセミなど 100 種以上の鳥がサント＝フォワ＝レ＝リヨンの丘に住みついています。このうち 30 種程度がそろそろ、中心街からさほど遠くないコンフレアンス先端に巣を構えるでしょう。コンフレアンスでは、生物多様性は脅かされることなく、むしろ豊かになっています。

### 川沿いの通路と公園エリア

ソーヌ川兩岸の遊歩道とジェルランまでのローヌ川の土手は長い 2 本の通路となって、動物達（鳥類、小齧歯類、昆虫など）の生息や、植物の繁茂に最適です。南には、ソーヌ公園と野原があり、生物多様性が守られた本当の意味でのエコロジーエリアが形成されています。生物多様性はそこから徐々に、通りや建物の中庭、街の広場などの町の中心部へと広がっていきます。

### シンプルかつ巧みなバランス

ハンノキ、トネリコなどの在来種を優先的に、カジミール・ペリエ通りやパイヤール通りの街路樹が整えられました。ランボー港の側では主に、縦にすっと伸び、工業地を想起させるようなかつての「荒地」でも生息できるだけの抵抗力を持つイタリアポプラが植えられました。外来種は排除されてはいませんが、地元の生態系に危険を及ぼさないよう配慮されます。リヨンの気候に既に適応している樹木のみが植えられています。同じようにソーヌ公園の池の水生植物に関しても、時と共に侵略的にならないように種の選択が慎重に行われています。

**3580 本**：ソーヌ川の側の公共スペースに植えられた樹木の数

**14ヘクタール**：ソーヌ公園の面積

## 騒音対策

高速道路 A7 号線、鉄道、幹線道路（シャルルマーニュ広場）などは、整備段階で騒音を軽減する対策が講じられています。

### 1. 騒音源対策

コンフリュアンス西部の最初の整備計画当時から、騒音の少ない新線路を設置したり、電車速度を 70 km/h から 30km/h へと減速することにより、鉄道からの騒音は軽減されました。ペラーシュ通りでは最高速度を時速 70km、さらに次段階では 50km に制限することでまずは騒音を軽減し、将来的には並走する高速道路を従来の市街道路に変えることを予定しています。

### 2. 建物の向き、遮音、吸音

音の反響現象を軽減するため、建物の形状と向きについての研究が続けられています。騒音源に近い新築建物には遮音対策が講じられる予定です。

### 3. 保護

騒音源の前に、建物、壁、丘といった遮音用の仕切りになるものを設置するというソリューションもあります。C 区画の中心や「ル・モノリット」ビルは、線路に並行して建てられたオフィスビルにより電車の騒音から保護されています。市場地区にも同様のコンセプトが適用され、ほとんどの住居がその中心部に建設され、幹線道路にそって並ぶオフィスビル群により自動車の騒音から守られる設計になっています。

### 規則を越えて

騒音規則では、騒音レベルの数値は音が出る頻度により調整されます。しかし、たとえ一晩に 10 回しか音がしなくても、80 や 90 デンベルの音は実際には騒音となります。リヨン・コンフリュアンスの取組みは単なる規則の適用にとどまらず、建物の住民が受ける実際の騒音を考慮します。

